

# 小原國芳からペスタロッチへ その1

— 為すことによって学ぶ —

“FROM KUNIYOSHI OBARA TO JOHANN HEINRICH PESTALOZZI” NO. 1

— LEARNING BY DOING —

坪 田 庸 子

Nobuko Tsubota

## 目次

はじめに

### I. 小原國芳の場合

1. その人となり
2. 小原の夢 (vision)
3. 人の教育

### II. ペスタロッチの場合 (以下次号に掲載)

### III. 小原とペスタロッチの類似点と相違点 おわりに

## はじめに

いつの時代にも教育に関する問題は多いが、今ほど低年齢層の非行化をはじめとして教育が見直されている時はないのではないだろうか。家庭教育がどこか歪んでいるのではないか。学校教育(幼児教育)のどこかに欠陥があるのではないか。

どんなに机上で教育論を論じても、それが正しく実践されなければ無に等しいのではないだろうか。教育は頭や口先きだけのものではなく行いがあるものだと思うのである。どんなに立派なことを話されても書かれてもその身に備わっていなければなんにもならない。しかし、一方では毎日の教育実践に追われて反省することも研究することもしなかったならば、その教育はマンネリ化し、進歩は見られないであろう。

こういうジレンマの中であって、私はどうしても「小原國芳」の研究を続けなければならないのである。何故ならば、上記の理由のほか、小原が提唱した「全人教育」をはじめとする教育理念が今どき通用しないし、古い古いと評する声がかかれる中で、玉川学園でこれまで標榜し実践し続けてきた「全人教育」について見直され、研究するものがふえてきていることの実事である。

今回私は小原が何故玉川学園を創設したのか。その想いを駆り立てた要因を探ってみようと思うのである。

そのためには、まずその人となりを、そして、彼の持つ夢(vision)を、その教育内容を、続いて小原に大きな影響を与えにペスタロッチ(Johann Heinrich Pestalozzi, 1746—1827) について論を進めたいと思う。

小原はペスタロッチの精神に基づいた田園教育塾、小原にとっては寺子屋を開き、ペスタロッチの教育思想を多くの著書の翻訳によって日本に広めたこと。さらにはペスタロッチの「一切合財他人のために、そのためには無」(Alles für Andere, für sich nichts!) を実践されたことである。このことは亡くなるまで講演の謝礼・原稿料・印税等をはじめすべて学園に献げられ、昭和49年米寿の際には自分名義の土地や家屋一切を学園に寄贈、自分で創設した学園のためとはいえ、それまでに19,555m<sup>2</sup>(5,926坪)の土地を、玉川学園に対する功績を称えて与えられた「玉川学園創設特別功労金」(1億円)をも寄贈する<sup>(1)</sup>ということまで徹したのである。

ペスタロッチは当時の社会情勢もあってのことであろうが施設は失敗に終わっている。しかし彼はその体験を生かして「人間を描く者<sup>(2)</sup>」となり、最初の著作『隠者の夕暮』をはじめ多くの著書を残し、今でもその教育理念はいろいろな形で生かされているのである。

小原の場合、彼の年来の夢である「全人教育」を実践するための学園は成功をおさめ、巨大な学園となりつつある。小規模であれば実践可能であり、その教育理念も隅々まで行き渡るであろうが、大規模校でそれを徹底させることは死難のわざではないかと思われる。しかし、玉川学園はあらゆる困難さの中であって、なお、全人教育を支える自然環境を含む小原の偉大なる財産(遺産)を生かそうとの不断的努力を続けているのである。

私たちが目先きのことに囚われることなく夢を持ち、夢に近づくよう努力することが大切なのではないだろうか。私たちの秋のリトリートでも Dr. M. B. Price が学生たちに「夢を持ちなさい。『幻なければ民滅ぶ』とい

われていますよ。」と訴えていた。学生たちが卒業に必要な単位に拘泥り、就職の事しか考えずに学生生活を送っているのに対して疑問を持ち心配しているようである。学生たちが自主的に study する気持を起させるためにも、今ここで夢を見ることとともに足元をじっくり見つめなおすことが大切である。

## 1. 小原國芳 (1887~1977) の場合

### 1. その人となり

元玉川学園総長、さらに遡れば、玉川学園の創設者である小原國芳。彼は一生を通じて夢を語り、ホントの教育を目先してそれを実践された。

彼のいうホントの教育とは「私のめざす教育は真正の教育である。ホントの教育である。いささかも虚偽にも不真実にも非正にも政策にも捉れないで、人間の正しい成長のみ心がける教育である。教師のあらゆる努力と念願はただ真正なる人間になるようにすることでなければならぬ。人間らしい人間、ホントの人間、立派な人間、清い、深い、純真な、強い、賢い、全き、聖い、善い、美しい、健やかな、……ここにあらゆる形容詞を尽しても、なお足りないほどの完美の人間が私の究極の願いである。神によりて造られた私達が、真に神に近づくことである。無論かかることは願ひである。人に望まれるべきことでないかもしれない。しかも願われ望まれるところに或る可能性があるかもしれない<sup>(9)</sup>。」ホントの教育を理解するために小原の生い立ちから見なければならぬが、まず、元玉川大学教授山本和の小原の紹介を見よう。

「小原國芳は一人の巨人であります。偉人です。慶応の福沢諭吉なきあと、早稲田の大隈重信なきあと、それに匹敵する独創的な私学教育、玉川学園を興した巨人です。しかしちょっと足りません。小原國芳には前の二人にないものがある。それは宗教です。宗教を根底に捉えた全人教育を唱えて60年。気骨逞ましい明治人間。しかも実に活動的な《若老人》でありました。《怖るべき老人》であり、神の恵みの贈物をたくさん受けたカリスマ的の人間、真の日本人で、諸外国に開かれた普遍的世界人です。一中略一

しかし、ただ巨大だけではなく、優しい、自然で幼児の如く天真爛漫、自由闊達であります。そして人間性に深い理解を持ち、幼な兒から青少年を熱愛された91年の御生涯を振り返ると、神はこの巨人に91年の生のための時を貸し与え、それをうけ用いて《時の充満》を起し給うている。実り豊かな大地のように、立派なよき果実を多く産み出したご生涯を顧みて、神の恵みを讃めたた

えるのみであります<sup>(4)</sup>。」

小原は10歳で母を亡くし、13歳で父をそれも父は金山の経営に失敗して、家屋敷・田畑を人手に渡してしまい、たくさんの借金を残して亡くなったのである。残された7人兄弟(17歳, 15, 13, 12, 9, 6, 3)(6男1女)は「イモとラッキョウとカツオの骨」を食べて、過ごしたという。父が生存中の時でも、母が裁縫やハタ織りを教えての賃仕事で生活を支え、小原は修学旅行にも行けず友人たちが旅行に出かけている3日の間に7、80ページもある薩摩地誌を写し、和とじをし、表紙も和紙を染めて製本したそうである。この作業は玉川大学出版部への構想のもとになったものと思われる。

また小学校の最終学年の時、川辺に県立の中学校ができたので、無理は承知の上で、長兄に中学校に行かせてくれと頼み、願書だけは出したものの学資がないことなど兄に諭され、泣く泣く進学を諦めた。このことと、小原が尊敬してやまなかった祖父茂右衛門、この祖父は郷里の寺子屋の師匠で塾頭だったのであるが、その祖父に倣って小原は教育者になることを夢見たのである。

電信技師から独学で鹿児島師範へ、そして広島高師へ進み、さらに京都大学へと向学心は燃えたのである。この苦労はその後の小原の夢、玉川学園の遠大な構想へのバック・ボーンのなったのである。

小原の特徴をよくとらえたものとして、小原の教え子諸星洪が小原の還暦祝にと書いた『玉川のおやじ』があり、その中で小原自身もこれほど自分のことをよく言い表わしているものはないとした、「二つを一つに」と題した詩がある、これは本当によく小原の教育理念を言い表わしていると思う。

### 「二つを一つに

貧乏人の子の教育もやったが、

金持の子の教育もやった。

天才教育もやったが、劣等生教育もやった。

並外れた虚弱児も世話したが、

並外れた体育家も仕上げた。

肥桶も担がせたが、ピアノも弾かせた。

聖書も読ませたが、算盤も確実にさせた。

大馬鹿になれと教えたが、

蛇の如く慧くとも教えた。

背広も着せたが、労作服も着せた。

もっとも男女生を近づけたが、

もっとも男女生間の純潔を保たせもした。

高遠な理想家だが、着実な実行家でもあった。

奔放な空想家だが、綿密な実家でもあった。

極めて胆は太かったが、極めて細心でもあった。

物質をもっとも利用したが、

物質にもっとも淡泊だった。  
 理解力が頗る広大なくせに、  
 頗る我は強かった。  
 人一倍怒りん坊だが、人一倍泣き虫だった。  
 もっとも妻を愛したが、  
 もっとも妻に暴君だった。  
 強大な慾望の持主だが、  
 晩酌一ぱいも近づけぬ清教徒だった。  
 誰にも負けぬ国際主義者であるが、  
 誰にも負けぬ愛国者だった。  
 複雑極まりなく単純であった。  
 もっとも個性を生かしたが、  
 もっとも他のために働いた。  
 反対のものを一つにする名人——小原先生<sup>(6)</sup>

二つの違ったものを一つにする名人、まさにその通り、  
 教育者でありながら、時には大会社(学園)を経営する  
 社長ほどの辣腕家であり、決してどちらかに偏ることの  
 ない教育方針を実践したのである。

小原自身も

「貧なるがゆえに、迫害されるがゆえに、苦しめるが  
 ゆえに、悩むがゆえに偉大になっていくもののあること  
 も事実である。一中略一幼にして母を失い、父を失い、  
 家財の一切をなくし、無自覚の結婚を強いられ、真実に  
 生きんとして迫害され、官学に苦しめられ、悪人、危険  
 人物として札付きになったことがいかに私を強めしこと  
 よ！ただ神に感謝す。神の公平を感謝する。

そのナニクソという不屈不撓の iron will それは実に  
 貧しきもの、苦しみしものの特権ではなからうか。ノー  
 ブルな気品と鉄石心。テニソンの言うなる「優美と剛毅  
 が真人を作る」という境地。花も実もある、「気はやさ  
 しくて力持ち」の桃太郎の性根。それを私は要求する。  
 すなわちホントの理想の学校の、不可欠の必然的の要素  
 として、兩階級の子供を得なければならぬ。相手が相互  
 に、よりよくなるためにその対立を必ず必要とする<sup>(6)</sup>。」  
 と書いている。電信局勤務を辞し、鹿児島師範学校に入  
 学、休暇には村の若い後輩を集めて勉強会をし、貧乏に  
 ヘクタレルナ、ガンバレ、ナニクソという意気込みだぞ  
 と叱咤激励したという。そのような時に尾島真治牧師  
 (1867~1950)<sup>(7)</sup>に出会い、ランシング宣教師(?~1933)<sup>(8)</sup>  
 に出会ったのである。

小原は人々に大風呂敷、法螺吹きと陰口を囁かれなが  
 らも夢の実現のために91年の生涯を捧げた。「クリスチ  
 ャンじゃないよ。小原教だよ。」という人もいるほどで  
 あるが、この小原教というのは小原自身が言い出したこ  
 とであって、宗教的信念とかを言っているのではなく、  
 全人教育を訴える小原教の教祖なのである。ヨハネが

イエスのことを告げて歩いたように、小原は大正10年の  
 八大教育主張講演会以来「ホントの教育」を呼び続けて  
 いるのである。

戦前は一面では「天子様」という言葉を使い、天皇に  
 対する臣民というか、親子関係に匹敵するものがある。  
 次のような文章は少なからず気になる。それは昭和13年  
 3月の『教育日本』の中の「この国に、この聖天子の下  
 に、みな、はぐくまれて力強く、この国に生まれたそ  
 の有り難さを感じて行けるこのうれしさ、ありがたさ！  
 この中心点あればこそ、如何に自由に、如何に大胆に、  
 如何に個性を発揮しても、一切の諸々の天上の星たち  
 が、涙のまさごを撒き散らしたような、あの幾千億の星  
 々の群が、実に整然として、それぞれの太陽が中心上  
 において天道様をシッカと持って、整然たる大法則の下に  
 大運行をしているというに、このありがたい、宗教的な  
 法悦の大家族的な慈悲溢るこのありがたい太陽系！

これを、マコトの教育のあこがれの姿ではないでしょ  
 うか<sup>(9)</sup>。」このような文を書きながらも国家の元首に対する  
 畏敬の念と民主主義を信ずる態度をあわせ持ち、戦後  
 には、『道徳教育論』を書いたあたりから、今度は政府に  
 近い態度をとり日教組批判などきびしいものができて  
 私たちを混乱させる。

「戦前、私はキビシク、真ん中に来るべく東西南北、  
 説いて廻った。それを『左党』と誤解された。戦後、ま  
 た、マンナカに帰れと忠告しとる。私は新教育55年、ま  
 あ真ん中を歩いて来てるのに、自分たちが右往左往しと  
 るのをさとらず、私は左だと誤解して危険視したり、右  
 と見て、『いつ転向したのか』とは全く滑稽千万である。  
 しかも、私が新教育55年を左右にぐらつかせず、たえず、  
 真ん中を堂々と闊歩し得たのは、祖父の寺子屋精神と、  
 強いサツマ魂と、少年の頃から培われたキリスト教の教  
 えとヒロシマの北条教育と、深い京都哲学のオカゲであ  
 った<sup>(10)</sup>。」ここで明らかになったことは小原の根底に宗教  
 が信仰があるという、そのことによって、その時代の病  
 弊に対してきびしい批判をあびせることができたのでは  
 ないかと思うのである。また実際に教育に携わりながら、  
 子どもに生きようという精神が根底にあったために本当  
 の教育を忘れてる者に対して同じようにきびしい批判  
 ができたのだと思うのである。

小原教ともいわれる行動、言葉、あるいは書かれたも  
 のは、一方では多くの信奉者をうみ、一方では非常に矛  
 盾だらけ、体系的でないとの批判をうけ、誤解されがち  
 である。アカデミックではないではないかともいわれる  
 が、小原が書いたものがアカデミックでなかったなら  
 ば、それに続くものが系統立てていけばよいのではない  
 かと思うのである。

## 2. 小原の夢

小原は好んで「夢」という字を書き、卒業生のために正月から準備し、自伝をも『夢みる人』と題しているほどである。

小原はいつもその夢を、理想を実現する方策をもっていった。この夢は根拠のないものではなく、『『民幻なければ国滅ぶ』、幻のないところに進歩があろうはずがない。向上があろうはずがない。私は永久に夢に生きたい<sup>40)</sup>。』ということと、聖書使徒行伝2章17節「若ものは幻を見、老人は夢を見る」にも通じるといわれている。どこにもない夢を見る、ヨハネ黙示録のような未来へのvisionを小原は現実化してきたのである。

この夢はすでに大正13年、小原が37歳の時に『理想の学校』と題して著しているし、またさらにその2年前に次のような文章を書いている。

「成城、中学、7年制、幼稚園、男女共学、成城学校、教師養成学校、洋行、大学、敷地5万坪、住宅、音楽堂、博物館、児童研究室、図書館、森のチャペル……

ああ、『夢の学校』しかも、この『夢』が私の頭の中には厳然として存在しているのだ。神の御心にかなうならば、キッ実現するのだ。ああ尊き『夢』よ。私は永久にこの夢に生きよう。

嗤わば笑え。私はこの夢に生きるのだ。10年、30年、50年、100年、この夢に生きるのだ。成ると信じて私は死力を尽すのだ。画策するのだ。成さしめ給うも神様、成さしめ給わぬも神様。神の御心にかなうようだ。少なくとも私が『夢の学校』を夢みている時に私は小原ではない。鯉坂ではない。神である。神様の考えが私の頭に宿っているのだ。ポーロではないが『われ生けるにあらざ』神様が宿り給うて生けるのである。神さまが私たちにのり移っていらっしゃるのだ。キッ神様はなさしめ給うのだ。

ああ貴き『夢』よ、私は一生、夢に生きる<sup>41)</sup>。」

小原は大正8年12月に広島高等師範学校を辞し、澤柳政太郎(1865~1927)<sup>42)</sup>の懇請により東京牛込の私立成城学園の小学校主事として赴任。この澤柳との出会いは小原にとって「一生の運の開け<sup>43)</sup>」であるといわれている。大正11年成城小学校第1回卒業生を出すにあたり、同じ学園の中学校設立の必要を痛感して、6,000円の金策に走り、無事第2中学校を設立。さらに大正12年には学校経営の一助として「イデア書院」を設立、これは現在の玉川大学出版部の前身である。主事になって5年目にもう『理想の学校』を著し、同年中に成城学園を分離させて、その校地を小田急沿線に求め、その金策のため東奔西走、秋吉台の聖者と小原が尊敬している本間俊平

(1873~?)<sup>44)</sup>を訪ねている。大正14年4月に実現、教育活動が開始された。大正15年成城高等学校、昭和2年には成城高等女学校が開校して成城の総合学園としての構想は完成。しかし、大正8年から小原が親しく薫陶を受けた澤柳政太郎は昭和2年、外遊の帰途、シウウコウ熱にかかり、帰国後死亡。小原は事務取扱として澤柳の教育信条、すなわち成城学園の教育信条を受け継ぐ。

- 「一. 調和ある人格養成の教育
- 二. 個性尊重の教育
- 三. 自学自律の教育
- 四. 学的根拠の上に立てる教育
- 五. 能率高き教育
- 六. 自然尊重の教育
- 七. 師弟間の温情<sup>45)</sup>

小原が半生をなげうって作った7年制高等学校が彼の教育理念と遠く離れた存在となってしまう、ということは例えば進学のための予備校化してしまったこと、教育ママからの脱出のため、さらには落ちこぼれ生徒の扱い方等の理由であるが、何よりも初心に帰って、全人、労作、自学自習の教育を実践するために小原は昭和3年の春には、もう一つの学園の構想を練り、校地調達を不動産業者に依頼し、同年9月には決意し、翌年4月には玉川学園を発足させている。

玉川学園の精神は(玉川信条12ヶ条)

1. 調和ある人格養成の教育
2. 個性尊重の教育
3. 自学自律
4. 能率高き教育
5. 学的根拠に立てる教育
6. 自然尊重の教育
7. 師弟間の温情
8. 労作教育
9. 反対の合一
10. 第二里行者と人生の開拓者
11. 塾教育
12. 国際教育

であり、この12ヶ条のうち7条までは成城学園の精神を受け継ぎ、守ろうと昭和4年4月8日教職員18名、生徒111名で開校式を行ったのである。

以上述べてきた小原の夢と実践の模様を玉川大学客員教授高山岩男は次のように述べている。

「小原は、玉川学園を死に場所とした。小原の自宅は学園内にあり、教育は小原にとって全日にわたるものがあった。学園建設に当るときは、いつも乱暴な徒手空拳であったが、小原には澤柳政太郎の如き彼を知る恩師があり、また狂気に近い情熱を理解して協力する実業人も

存した。天は彼を見捨てなかったわけである。彼の筆舌を絶した苦勞がただの天才の狂気に終らず、大いなる実を結んだのはこのためだと思ふゆゑ。』

小原の夢の中でも実現できなかったものもある。それは東京新宿駅の20階の高層ビル。1, 2階を駅舎として3階以上は学校にということだったが。しかし、小原の夢は鹿児島島の久志農場、北海道の屈斜路農場、そして日本だけにとどまらず、ブラジルやカナダへととんでいる。ブラジルでは10里四方の無料払い下げを受け、カナダではバンクーバーに近いナナイモ島には3万㎡の土地を求めナナイモキャンパスとしているという。これらを具体化するのには後に続くものの務めではないであろうか。

小原は彼の最後の著書となった『教育一路』に次のように感謝の言葉を述べている。

「300名位のシンミリした寺子屋教育、ホントの塾教育を願っていた私の夢が叶えられ、今日、さらにこうして夢の持てることは、私と共に苦しい、いやな、損な場面を真実に、微笑をもって担当してくれた同人たちのおかげです。どんなに私一人が力んでも、笛を吹いても踊ってくれる者がいなかったら、今日の玉川は存在せず、また私の夢もただの夢として終わったかもしれません。何としかあわせ者かと心から感謝せずにはおれません。この同志たちと共にさらに大きな夢を見たいのです。同人たちよ。若人たちよ。自分を越えて進んでくれ！<sup>100</sup>」

小原の前半生の苦勞が後半生において花開き実を結んでいるこの現実こそは夢を実現するその実行力、その腕となり足となる協力者に恵まれていたことの結果であると思うが、やはりその夢を現実化できたのは小原の人柄であると思う。小原がいつも『人』になれといていたその『人』に小原自身が到達していたからではないかと思う。

私たちは極めて不完全な人間であるから、完全を求め、理想を描き夢を見て、そのことに向って邁進すること。そしてその人なりの人となるために、その夢の芽を育むためにも全人教育が必要となってくるのである。

### 3. 人の教育

小原の教育理念は普通、「全人教育」といわれているが、「全人教育」では言い表わせない多くのものを含んでいると思われる。そこで私は小原が『理想の学校』に書いている言葉を念頭におきながら、「全人教育」なるものを考えていきたいと思う。

「今一つ、申しおきたいことは『全人教育』とは、私の教育論の全体ではないのです。一中略—実際の教育は失礼ですが、文字の上からよりも、実際、私の子どもた

ちと遊んでいる間を見ていただきたい。それが私の教育です。しかも、私の文字とでも、『全人教育』以外にまだまだ、いくらか私の教育論はあると思います。『全人教育』とは、現代日本の教育に対して、とてとても腹が立って仕様のない問題が山ほどあるのですが、その中の特に腹の立つ理想論について、その非を絶叫したまでです。—中略—

何とも名のつけられない、ただホントの教育よりほかに何も無いのです。目ざす処はただ一つ。ホントの人間。否、ホントの子供をつくることよりほかに何も無いのです<sup>101</sup>。』では小原が要求する『人』とは、

「哲学（科学も含む）、芸術、道徳、宗教の四文明の理想とするところの、真善美聖の四つの絶対価値、これが私の要求する人間内容である。これが私の教育の理想を指示するものである。そして手段価値として、生きんがために経済の生活と健康。すなわちそれらの理想とする健と富。これが人間が生きていくための手段である。—中略—われわれが、出来るだけ有効に、出来るだけ永続的に、出来るだけ強く深く精神生活を発揮し、その目的を果し得る手段である。だから、私の教育においては真育、善育、美育、聖育、健育、富育の六つを要求する。かかる全人陶冶を事情の許す限り施したい<sup>102</sup>。」小原のいう六つの価値、コスモスの花のように調和と統一のとれた人を目ざすという。

調和のとれた人作り。人間らしさへの鍛え込み。頭が良くっても体が弱くは困るし、頭も体も良くっても心が貧しければまた困りものである。

元玉川大学教授戸川尚は小原の「全人教育」をやさしく説いている。

「いつでも、何処でも、行すべきマナーの実行できる子、誰も見ていない場所でもエチケットの守れる子、人に不快を与えず、人々に迷惑をかけぬ子は、常に時と、処と、自分の立場をわきまえています。全人教育は、このような身近な実践力から進みます。

正しい道理を求め(真)、良き行いを身につけ(善)、しかも目にも心にも美しい世界を追求し(美)、これらが諧調をなすように、生命本来の基本に目覚める(聖)という大切なあり方、更に加えて二つ即ち、健康な体の育成と、衣食住の生活技術の充実、この六面調和論が、玉川の全人教育論なのです。しかも、この調和力の根本姿勢として、相反するものが相互に依存し、相即すべきことを実践で示す力を教えて下さったのが小原國芳先生です<sup>103</sup>。」

こんなに身近な教育を私たちはなかなか実践できないのである。前述の戸川は、もっとやさしく私たちに訴えている。

「全人間性の調和的な発達を期する『全人教育』の第一の門は、必ず『耳』を育てる教育ではないかと思えます。親の言葉を素直に聞ける耳を育てることです。他人の忠告を従順に受け入れる耳、教師や先達の戒めを心の耳で聴き採る態度、ここから人間らしさへの道が通じ、ほんとうの知恵ある人にも入りやすくなるものと思えます。

素直な耳が養われていればこそ、宗教的な情操も培われ、更に『第二里に行く』ことのできる道徳的実践力も身につけてまいります。『気をつけ』気を配り、『気をきかせて、喜んで奉仕する態度、骨身を惜しまず、第一里の義務を乗り越えてサービスするほどの能力は、玉川でこそ養われる心の教育でしょう。徳育の中心でありましょう。広く、そして深い数知れない知力と、健康な体力とがこのような徳力と調和して『全人的教養』への道を進むのであります。さらに美的情操陶冶と、技術上の練磨とを加えて『全人観』を成就されたのであります<sup>24)</sup>。

全人教育が教育の永遠の理想であると同時に身近なことから実践できる教育であること、特別なことではなくごくあたり前のことだったのである。しかし、このあたり前のことが現在の教育では忘れられているのだということに気づかされる。

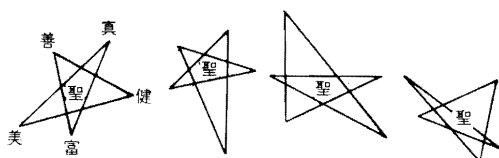
小原の願いは「主義。主義なる名辞も今は呪います。私は一切の主義と主張を撤廃して、ただ『人』に帰りたい。『人に帰れ、人に帰れ。』ただ『人の教育』です。そこには自ら否応なしに、ホントの教育が生まれます<sup>25)</sup>。」であるといい、続けて『『全人』すら呪います。『人』それは発しては個人であり、社会であり、国民であり、人類であり、神の子であり、人の子であり、腕は働くべく、頭は考うべく、美を慕い、善を行ない、しかも体系的秩序を有する一個の大宇宙です。しかも、各自が『天上天下唯我独尊』、唯一無二、全世界とも代えられない大宇宙なのです<sup>26)</sup>。』

教育は人を対象とするべきものであるのに、その人をどのような人として教育していくかという目標が失なわれてしまっているのである。有名な幼稚園に入れ、有名な小・中・高にさらには大学そして会社へとただそれらにのみ邁進し、人そのものその人の持つ人格がお座なりにされている。A子もB子も同じ個性のない服装をして、何でもが右へならへの風潮がひどくなっている今、私たちはもう一度、一人一人の個を大切に、人中心の教育を施すようにしなければならないと思うのである。

小原は『人』が心と身を兼ね備え、真・善・美・聖・健・富を備えてほしいと願っているが、それが完全に備わっていなければならないというのではないのである。『人』はいつも理想と現実、全人と個性あるいは心と体

と二元の対立、二つの狭間に往生している存在であり、まことに弱いものであるからして、その欠陥の多い自分を見詰め、現実立って一歩でも理想に近づこうと努力する、そのようにもっていくところのものが教育であると思うのである。

小原はどんな教育も一面のみを強調してはならないといわれる。しかし、一人一人の『人』がコスモスの六弁の花というよりも前述の戸川尚のいっている「聖を中心とした星<sup>27)</sup>」だったならば、整然とした形の星ではなくてもそれぞれ個性豊かな『人』が育つのではないだろうか。『人』その中心となるものをしっかりととらえていたならば、必ずや調和のとれた『人』が自ら作り上げられると思うのである。



Aタイプの子 Bタイプの子 Cタイプの子 Dタイプの子

タイプは違ってもそれは真善美聖健富をそなえている。(戸川尚著「全人教育について」より雑誌「全人教育」No.339, 昭和56年10月号)

小原自身、京都大学の卒業論文「宗教による教育の救済」から『師道』その他全48巻の全集にもられた、クリスチャンとしての小原その人と思想、人と教育が一体となっているのである。小原自身がその信条を身をもって示しているのである。これこそが教育であると思う。小原がこれまでにあったのも多くの人との出会いから会得されたものであろう。91年の間その生き方が、彼の信条であり信仰告白であり、指導の力であり目標であると思うのである。

すなわち、

詰め込むことではなく、発見させ、つかみとらせることだ。教育は子どもが自分の運命を切り開いていく力をつけさせ。それぞれその人にあった道を進ませる。その人の本領を発揮させることなのである。

**Learning by doing** なのである。

(以上は、1983年7月12日弘前学院大学一般教育学会研究懇話会での『小原國芳の夢』に若干の補筆をしたものであることをおことわりする。)

引用文献・参考文献

- 小原國芳著 小原國芳選集 3  
『全人教育論・思想問題と教育』玉川大学出版部  
昭和55年版
- 小原國芳著 小原國芳選集 4  
『教育改造論・自由教育論』玉川大学出版部 昭和  
55年版
- 小原國芳著 小原國芳選集 5  
『道徳教授革新論・学校劇論・理想の学校 玉川大  
学出版部 昭和55年版  
『教育論文・教育随想 4』玉川大学出版部  
昭和48年版  
" " 5』 " " 昭和48年版  
" " 7』 " " 昭和44年版  
" " 8』 " " 昭和54年版  
『教育講演行脚・身辺雑記(1)』 " 昭和48年版  
『全人教育』 " 昭和50年版  
『夢みる人 II』 " 昭和56年版  
『教育一歩』日本経済新聞社 昭和51年版  
南日本新聞社編『教育とわが生涯 小原國芳』玉川大  
学出版部 1977年版  
諸星洪著『玉川のおやじ』玉川大学出版部 昭和42年  
版  
ワルター・アスムス講演集 金丸弘幸他訳『人格性へ  
の教育』玉川大学出版部 1979年版  
鯨坂二夫著『小原教育』玉川大学出版部 昭和50年版  
鈴木博雄著『母親は何ができるか』日本教文社 昭和  
48年版  
攻村敏雄著『ペスタロッチの生涯』玉川大学出版部  
昭和58年版  
福島政雄著『ペスタロッチ』福村出版株式会社 1981  
年版  
ペスタロッチ著・福島政雄訳『隠者の夕暮』福村出版  
株式会社 1981年版  
市村秀志訳『補ペスタロッチにふさわしき妻アンナ』  
玉川大学出版部 昭和55年版  
雑誌 小原國芳監修「全人教育」No.343 玉川大学出  
版部 昭和52年10月号  
雑報 小原哲郎監修「全人教育」No.347 昭和53年 2  
月号  
誌誌 小原哲郎監修「全人教育」No.399 昭和56年10  
月号

注

- (1) 小原哲郎監修「全人教育」No.349「一切合財を玉  
川学園のために」昭和53年 4月号 26頁。  
(2) ワルター・アスムス講演集『人格性への教育』玉  
川大学出版部 1979年版 59頁。  
(3) 小原國芳著 小原國芳選集 4『教育改造論・自由  
教育論』玉川大学出版部 昭和55年版 241頁。  
(4) 小原國芳監修 雑誌「全人教育」No.343 昭和52  
年10月号 8頁。  
(5) 諸星洪著『玉川のおやじ』弟子の見た小原先生  
玉川大学出版部 昭和42年版 145頁。  
(6) 小原國芳著『小原國芳選集 5 道徳教授革新論・  
学校劇論・理想の学校』玉川大学出版部 昭和55年  
版 399頁。  
(7) 長崎・東山学院神学部卒、日本キリスト教団渋谷  
教会所属。  
(8) Harriet M. Lansing 明治20~21年頃、来日、最  
初は長崎に、やがて鹿児島に。プレスビテリアン派  
の教会に属す。昭和 8年 3月アメリカにて没。  
(9) 小原國芳著『教育論文・教育随想 4・5』玉川大  
学出版部 昭和48年版 4—181, 354頁。5—72頁。  
(10) 小原國芳著『教育論文・教育随想 7』玉川大学出  
版部 昭和44年版 176頁。  
(11) 小原國芳著『小原國芳全集 8 理想の学校・教育  
立国論・道徳教育論』玉川大学出版部 昭和54年版  
17頁。  
(12) 小原國芳著『小原國芳全集 21 教育講演行脚・身  
辺雑記(1)』玉川大学出版部 昭和48年版 58頁。  
(13) 教育者であり、教育行政者。長野県生まれ。東大  
卒。東北大初大総長・京大総長、1916年帝國教育会  
長となり、初等教育の改革に力を尽した。(佐藤直助  
・平田歌二編『新版世界人名辞典日本編』昭和53年  
版東京堂出版による)  
(14) 小原國芳著『夢みる人 II』玉川大学出版部 昭  
和56年版 219頁。  
(15) 新潟県生まれ。1897年留岡幸助牧師より受洗。  
1902年秋吉山に入り、大石石採掘所の事業のかたわ  
ら受刑者たちの魂の救いのために尽力される。(小原  
國芳著『小原國芳全集 11 秋吉山の聖者本間先生』  
玉川大学出版部 昭和53年版による)  
(16) 南日本新聞社編『教育とわが生涯 小原國芳』玉  
川大学出版部 1977版 152頁。  
(17) 小原哲郎監修「全人教育」玉川大学出版部 No.347  
昭和53年 2月号「全人教育に生きた天才」1頁。  
(18) 小原國芳著『教育一歩』日本経済新聞社 昭和51  
年版 150頁。  
(19) (6)と同じ 383頁。  
(20) (6)と同じ 437頁。  
(21) 小原哲郎監修「全人教育」No.399 玉川大学出版  
部 昭和56年10月号  
(22) (21)と同じ。  
(23) 小原國芳著『全人教育』玉川大学出版部 昭和50  
年版 30頁。  
(24) (23)と同じ。  
(25) (21)と同じ。